

# トヨタ財団レポート

## THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号  
 新宿三井ビル37F(〒160)  
 TEL. (03)344-1701~3  
 Oct. 1979 No.7

### 第18回理事会開催

#### 研究助成など110件の助成対象を決定

トヨタ財団では10月3日、東京にて第18回理事会を開催、下記の通り昭和54年度の助成対象を決定しました。

● 研究助成	87件	2億7029万円
交通安全、生活・自然環境領域	24件	9943万円
社会福祉領域	24件	7009万円
教育・文化領域	23件	7061万円
特定課題	16件	3016万円
● 事業助成	8件	2379万円
国際学術研究集会助成	3件	1059万円
「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成	5件	1320万円
● 国際部門助成	14件	6036万円
● フェロシップ助成	1件	3000万円
● 以上合計	110件	3億8444万円

研究助成は本年度で第5回目の助成となります。従来の3つの領域に加え、今回は新たに特定課題「地域社会の変化に関する実証的研究」を設定いたしました。本年4月初日から5月末日にかけて一般公募し、合計682件の申請をいただき、この中より選考委員会での厳正・慎重な審議を経て前記の助成対象が決まったものです。

事業助成には3年前から始めました国際学術研究集会助成と昨年度から始めました「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成の2つのプログラムがあります。前者は日本で

開催される国際会議に開発途上国の人々が参加する場合の出張旅費・滞在費を助成するもので、本年4月から5月末日にかけて一般公募し、合計16件の申請をいただき、選考委員会での審議の結果前記3件が助成対象となったものです。後者は東南アジアで出版された著作物を日本語に翻訳し出版するための翻訳料を助成するものでこの5月初日より応募を受けつけております。今回の助成はこれまでに申請のあったものから選考したものです。本年10月末日まで公募しております。

国際部門助成は主として発展途上国を対象として、海外からの申請に応じて助成するものであり、フェロシップ助成は(財)国際文化会館が運営する「社会科学国際フェロシップ・プログラム」に対して助成するものです。



### “身近な環境をみつめよう”研究コンクール 10月15日より公募開始

設立5周年記念事業の一環として検討を進めてきました表記の研究コンクールは、いよいよこの10月15日から公募を開始することにいたしました。

この研究コンクールは、地元の関係者と専門の研究者との共同による日常生活圏を対象とした研究活動を促進し、生活と密着した“身近な環境科学”の発展に寄与することを目的として行うものです。(詳しくはP.9参照)

応募要項は官製ハガキにて財団事務局にお申込ください。

### 日本の子供達への小さな贈り物

#### 『アジアの子供劇場』愛知・埼玉で公演

当財団の5周年記念事業の一つである国際ワークショップ「アジアの子供劇場」は、この8月、東南アジア4ヶ国からの34名の青年達を迎え、また日本側では(財)おはなしきゃらばんセンターの大変熱心な協力を得て、無事愛知県下、埼玉県下での公演を終えることができました。多くの子供達にとって印象深い夏の思い出となったのではないのでしょうか。ご支援いただいた多数の方々に感謝申し上げます。

(写真は児童博会場でのフィリピン・チームの公演)



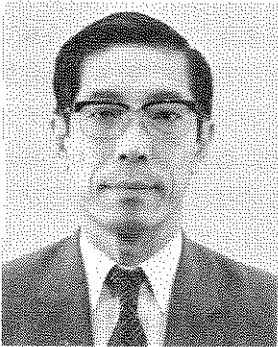


研究助成 5 年間で振り返って①

## 転換期の研究活動に期待する

交通安全、生活・自然環境領域選考委員長 浅田 孝

財団発足後の最初の 5 年間を経て、研究助成事業もどうやら着実に根を下すことができたと思われる。この間、熱心なそして真剣味あふれる申請を寄せられた広範な研究者の方々、これを受けて無私厳正な選考に当られた選考委員の先生方、さらには財団関係の皆さんに対して心からの敬意を表したい。



ところで、おそらくは数十万人に上るであろう関係者の永年の労苦と汗の結晶から基金の寄附をあおぎ、その果実をもって国の内外の真摯な研究者の広範な要請に応えるという、独自の民間助成財団の活動は、わが国においては今やとはじまったばかりと言ってもよく、その意味で当助成事業の 5 年間も、申請者・選考委員会・財団の 3 者の文字通り前向きな試行錯誤の歴史であったということができよう。それが今日一応の社会的評価を獲得することができたのは、社会の「公共善」のためにという 3 者の間の阿吽の呼吸が守られてきたからに外ならない。

### 選考の労苦

毎年 200 件を越すという「交通安全、生活・自然環境領域」においても、その中から 1 割足らずに的をしぼるという作業は、実際に当たってみると容易ならぬ責任と労苦の伴うものであるということは直ちに知れた。申請者が真剣であればあるほど、選考委員会が公正無私であろうとすればするほど、ビッシリと書き込まれた申請書類の数千頁を繰り返し読み通さなければならない。

私どもの担当領域が広くかつ今日の工業社会と深くかわり合っているだけに、委員の皆さんの労苦はなまなかのものでない。時には多忙の中を数日に渉る公休をとって読み通されることもあった。誠に頭の下る思いで敬服申しあげることしきりである。

そんな中で先年、政府の環境基準変更に関連して新聞紙上にこれに引っかけ、トヨタ財団の助成云々が報ぜられたことがあった。ひと目で選考委員会の実状を見

られれば根も葉もないことと了解されたに違いない。私は選考委員会の名において、断じてそのようなことはあり得なかったし、今後もあり得ないであろうことを誇りをもって断言申しあげることができる。幸か不幸かこの記事のおかげで、当財団の厳正さについての評価が高まった後に承りわが意を得た思いであった。

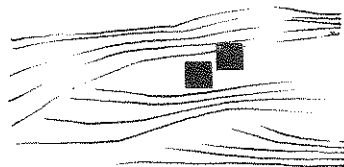
### 交通・環境の 2 つの分野

私の担当する領域は、交通安全の分野と生活・自然環境の分野に大別される。このうち交通安全の分野は当財団の性格から誰もが第一に無理なく理解できる分野であろうが、発足当初の技術開発にバイアスのかかった申請内容から、最近では実社会の側の事態の進展と相まって、何か新しい研究角度への模索がはじまっているように感じられる。

生活・自然環境の分野として申請される研究についてもまた申請者と選考委員会との間で少なからぬ試行錯誤の繰り返しが行われたと言ったほうが当たっているかも知れない。もともと環境問題は人間生活の基本的かつ包括的な問題であって、その研究も、環境科学というまとまった分野があるというよりは、今こそすべての科学分野の力を借りて環境問題の基本から取り組まねばならない時期にあるという、転換期の時代の要請から来るものであろう。研究者の側でも、この要請に応えようと意欲と探求心に充ちた工夫がなされつつあることは喜ばしいが、それだけに問題なしとは言えない。

### 学際共同の困難さ

ただひとつだけ私見を言わせていただくと、いわゆる「学際的な共同研究」の意外に実りの少いことである。わが国で実り豊かな真の「学際的な共同研究」が成果をあげるための基礎条件づくりに何か欠けているのであろうか。私ども自身の問題でもあるだろう。はやりの「インター・ディシプリナリー」の追求に急なあまり、共同研究者に求められる個々の「ディシプリン」のより高い達成という問題が忘れられたかに見えるが、いかがなものであろうか。(あさだ・たかし (株)環境開発センター社長、(財)トヨタ財団理事)



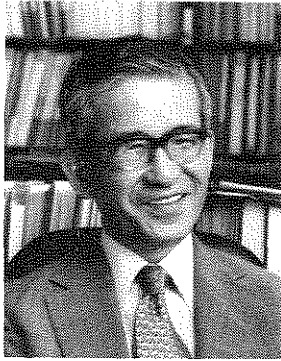


■■■■■■■■■■ 研究助成5年間の振り返って② ■■■■■■■■■■

## 独創的な研究を育てるために

社会福祉領域選考委員長 大島正光

トヨタ財団の研究助成も5周年を迎えることになり、社会福祉領域の選考委員長としての私の活動も5年を経過したことになる。東京大学在任中は研究助成を申請する立場にあったが、トヨタ財団ではそれを選考するという逆の立場になって、日本の研究の進む前段階としての助成の申請とその選考という両面の作業に参与したことになるわけである。



### 選考する立場

申請者の立場としてはある分野の研究の全貌を知る必要は必ずしもないが、助成対象を選考する立場としては、その分野の全貌を知り、それぞれの申請の位置づけができて選考の基本的条件がととのうわけであるので広く全体像を見られることが一つの必要条件であろう。社会福祉という広い分野においてこの必要条件を満足させるためには、それなりの勉強が必要であると考えてその努力はしてきたが、社会学・経済学・心理学・医学・工学など広く種々の学問分野にまたがっている学際的な領域であるだけに大変である。

さて選考に必要な次の条件は公平無私ということであろう。自己の学問分野のものに目が特に向けられ勝ちであるが、それは公平無私の条件に反するものと言わなければならない。幸いにして数名の選考委員が各分野から選ばれて覆面で選考の作業に携っているのので、各自の専門分野に傾き勝ちな傾向の是正はうまくいっていると見てよいであろう。

### もっとほしい研究助成の枠

申請者としては最良と思うプロジェクトについてのプロポーザルを提出しているわけであり、それだけ研究に対する熱意に燃えているのであるが、財団の助成額の枠から結果的には十分の一の合格率になってきており、その採択はかなり厳しいものであると言わなければならない。従って採択されたものとされなかったものとは連続的であって、両者の間に段階的な差があるわけではない。

採否は必ずしも良否の判定とは異なるわけで、不採用のものにも研究をぜひ進めてもらいたいものが数多く含まれていることは当然のことである。金額の枠がもっと広ければ採択の中に入って研究が実施されるわけであり、その点では研究助成を行う機関の増加することを望むものである。

それにしても、従来研究助成金が比較的少くて十分な研究ができなかったのに対して、トヨタ財団が1件1000万円を越える研究助成金を出した実績は高く評価されてよいのではなかろうか。日本人の創造性の足りないことが時々指摘されているが、研究費にそれ程こまらずに独創的な研究ができるようになれば、やがては他の国からの指摘も消えてゆくことであろうと思う。独創的な研究は一方、結果がはっきり予測できにくいものである場合もあるが、トヨタ財団としては別にその辺に固執するものでもないで、今後ともそのような研究を大いに歓迎するわけである。

### アフター・ケアの必要性

研究助成を行ってもそのまま研究がやりっぱなしにされる場合が一般になきにしてもあらずであるが、その点アフター・ケアとして出版助成などの「成果発表等助成」を行ったり、財団主催の研究報告会を行うなどの努力をしているのもトヨタ財団の特色といってもよいのではなかろうか。選考の任にある者としては、公平に選考が行われ、採択されて大いに研究成果のあがるのが最も望ましいことであり、その点ではアフター・ケアも含めて日本の研究レベルの向上に寄与することができれば、それにすぐることはないわけである。したがってシンポジウムなどで成果のあがった報告を聞くことは喜びこれに過ぐることではない。

※ ※ ※

以上5年の歳月をふりかえって思い出すままに記してきたが、さらに選考の続くかぎり、選考のあり方についても十分に検討を加えてより満足のできるようにしたいと考えている。そして採択されて研究成果をあげられた方、採択されなくて捲土重来を期する方のいずれを問わず、研究活動が我が国にとって重要であることは言うまでもないことであり、トヨタ財団が研究者に対して「助成」という大きな役割を果たしていることに深い敬意を表したいと思う。(おおしま・まさみつ (財)医療情報システム開発センター理事長、(財)トヨタ財団理事)





## 資料：過去5ヶ年間の研究助成データ

下記にこれまで5ヶ年間の申請・助成の数量を整理してみました。

申請件数は年により若干変動はありますがほぼ一定の値を上下しています。ところが申請金額の方は年を追って小さくなってきております。最初の年は1件あたりの平均申請額が1000万円を越していたのが最近では500万円を割っております。この傾向は助成実績を反映していることでしょうか今後の方向として考えてみなければなりません。

助成の方では助成額はあまり変化はありませんが年々

助成件数が増えています。1件あたりの助成金額が小さくなってきている訳です。この背景には2つの理由があります。1つは大規模な単年度助成よりも小規模であっても継続助成の方が意義があるのではないかという考えが強くなってきたこと。1つは1件150万円以下の予備的研究が多数加わってきたことです。しかしこれ以外にも全体的に規模を小さくしている要因はありそうです。申請者の皆様から寄せられたご意見の多くに「小額でも多数の人に助成を」というのが見られました。これが必ずしも適切かどうか分かりませんが、結果的に見ればそういうことになりつつあるわけです。今後適否の検討が必要でしょう。

### <交通安全、生活・自然環境領域>

	年度	50	51	52	53	54	5ヶ年合計
件数	申請	349	331	242	253	221	1,396
	助成	14	18	22	28	24	106
金額	申請	379,200万円	229,618	197,715	155,578	113,238	1,075,349
	助成	9,255万円	12,405	12,262	11,573	9,943	55,438

### <社会福祉領域>

件数	申請	143	146	132	177	155	753
	助成	12	14	14	22	24	86
金額	申請	189,900万円	96,339	86,590	98,851	77,603	549,283
	助成	6,190万円	8,300	7,451	7,407	7,009	36,357

### <教育・文化領域>

件数	申請	186	150	136	202	198	872
	助成	12	20	22	23	23	100
金額	申請	163,400万円	84,199	69,662	86,146	68,871	472,278
	助成	4,683万円	8,450	7,682	7,536	7,061	35,412

### <特定課題>

件数	申請					108	108
	助成					16	16
金額	申請					35,091	35,091
	助成					3,016	3,016

### <合計>

件数	申請	678	627	510	632	682	3,129
	助成	38	52	58	73	87	308
金額	申請	732,500万円	410,156	353,967	340,575	294,803	2,132,001
	助成	20,128万円	29,155	27,395	26,516	27,029	130,223
1件当たり	申請	1,080万円	654	694	539	432	681
平均金額	助成	530万円	561	472	363	311	423



5周年記念事業報告

国際ワークショップ  
「アジアの子供劇場」

去る8月6日(月)から19日(日)までの2週間、愛知県青少年公園とその周辺都市および埼玉県嵐山で、当財団は設立5周年を記念して、国際ワークショップ「アジアの子供劇場」を開催しました。このワークショップは国際児童年を記念して、愛知県青少年公園で「世界と日本のこども展」が開かれる期間に合わせて行われたもので、愛知県教育委員会、埼玉県教育委員会ははじめ多くの方々から協力をいただきました。

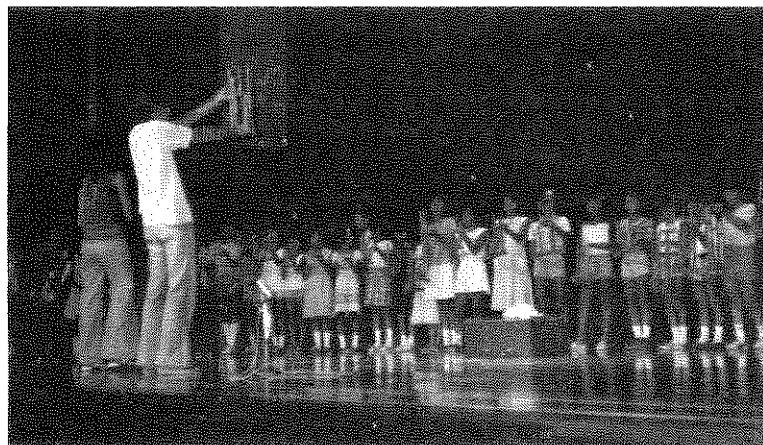
ワークショップの主なねらいは、日本の子供たちに東南アジアの劇(子供のための劇)を紹介すること、東南アジア諸国相互間のおよび日本と東南アジア諸国間のこの分野における交流と協力を促進することにあります。

東南アジアから招待したのは、インドネシア、マレーシア、フィリピン、シンガポール、タイの青年34人でした。

大阪空港に着いたマレーシア・チームを迎える



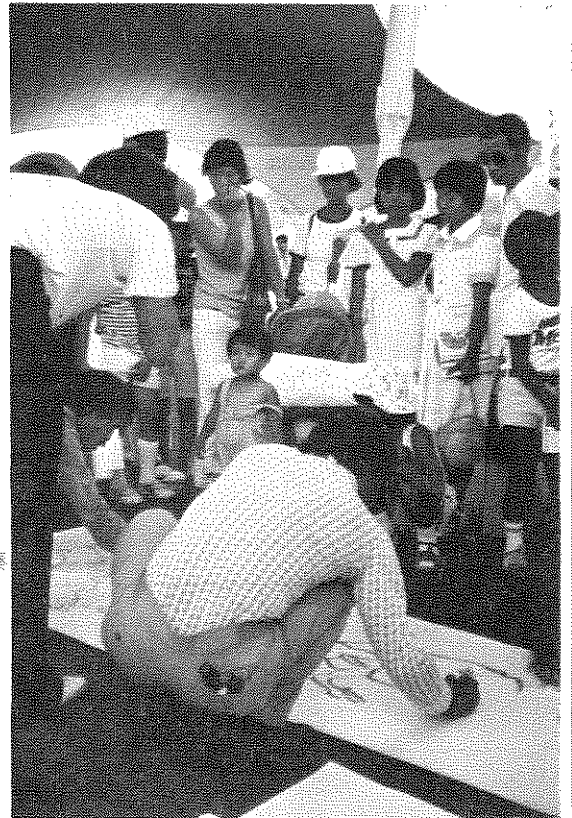
インドネシア・チームのラデン氏と日本の子供達による竹製楽器アングルの演奏



参加した青年達の職業はさまざまでしたが、次の3点で共通点を持っていました。1) 子供劇場の活動(劇、人形劇、パントマイム等)をボランティア的に行っていること(民間非営利)、2) 名声を既に確立した人々というよりもむしろ今後を嘱目される青年であること、3) 西欧の子供劇場の単なる模倣ではなく、また伝統芸術の単なる固守でもなく、伝統と現代との融合を常に考え実践しているグループであること。

2週間のワークショップ期間のうち前半は公演を行い後半は会議が中心となりました。前半、後半両方に参加した日本側チームは、共催を引受けられた(財)おはなしきゃらばんセンターで、後半の会議には、大学の人形劇サークルや地方のおはなしきゃらばん、子供劇場の代表者等のボランティア約80人が参加しました。公演を行ったのは、インドネシア、フィリピン、タイ、日本の4チームでした。全チームとも、観客が参加できるよう仕組みをし、観客との交流に工夫をこらしていたので、子供も親も大変楽しんで満足して帰って行かれました。

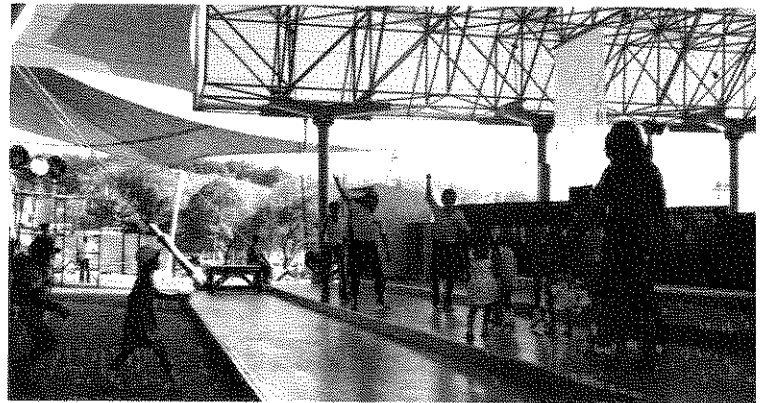
子供達のために絵を描くタイ・チーム代表のテプシリ氏







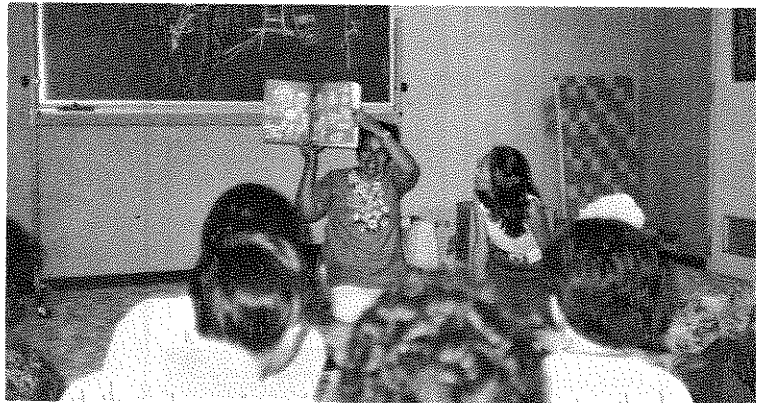
インドネシア・チームのティザール氏によるワヤングレ人形劇



タイ・チームによるパントマイム「縄飛び」に参加する子供達



日本チームによる「はると三太の鬼退治」公演中の観客との遊戯



勉強会で絵本の説明をするフィリピン・チーム代表のホニファシオ教授

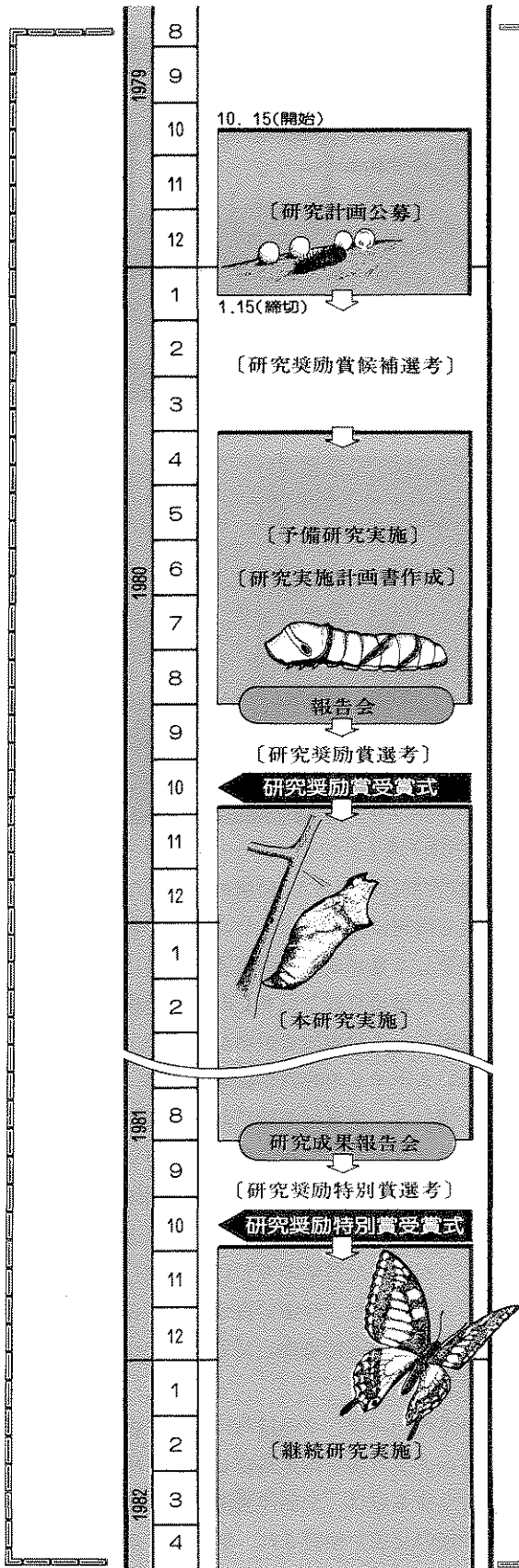
会議は「ボランティアの研修—アジアの子供劇場促進のためのワークショップ」という題で行われ、前述の4ヶ国の他に、マレーシア、シンガポールが加わりました。この2ヶ国には今後公演をするグループが育とうとしてるところなので、招いたものです。参加者は、各グループの活動の経緯、直面している課題、今後への展望などを話し合っており、最終日に次のような決議を行いました。

子供劇場は、子供の娯楽のメディアとして、また、子供が現代の諸問題に面と向うようにする教育手段として重要である。参加者一同は、子供劇場活動を通して、それぞれのコミュニティのニーズに応え、伝統に立脚して自国のアイデンティティを保つことに貢献するよう努力する。また、子供劇場活動の資金を自己調達できるように努めたい。子供劇場に関連する情報交換を今後進めたい。適切なスポンサーがあれば、このようなワークショップを少なくとも3年毎に開きたい。

アジアでこの種のワークショップが行われたのは初めてです。2週間にわたる移動しながらの共同生活によっ

て、参加者相互間はもちろん、公演が行われたコミュニティとの交流も活発に行われました。また、異国の子供を相手に実演をして見せる過程が組まれていたので、単なる会議からでは得られない多くの事を参加者は得たようです。東南アジア側参加者が学んだ事は、読みきかせの技術、よいスライドや映画や絵本の実例、各種の人形の作り方、使い方、児童図書館活動を基礎にした子供劇場活動展開のノウハウ、広報活動のノウハウ、等でした。日本側参加者が学んだ事は、東南アジア諸国の青年が設備や器材に頼らずに、物資の無いなりに工夫しながら一人一人がしっかりした哲学のもとに活動を行っているという事実でした。また、今まで自分達にとってほとんど無縁の遠い存在であった東南アジアが非常に身近になったそうです。

なお、日本チームは、この12月に国際交流基金の援助を得て、東南アジア5ヶ国を巡回します。現地で行く受入れ協力をするのは、今回の東南アジア側参加者ですから、その後の交流が検討され、展開されることでしょう。



## 研究コンクールの概要と実施スケジュール

- 研究コンクールの対象となる研究計画を公募します。 →対象となる研究
- この研究計画は、当財団の定める応募要項に基づき所定の応募用紙に記載していただきます。 →応募方法
- 選考委員会にて選考が行われ、約20件の研究奨励賞候補が選出されます。 →選考方法
- 選出された研究奨励賞候補に対して、研究計画案の具体化(内容・方法・体制の確立等)に必要な費用(50万円以内の必要額)を助成いたします。 →準備助成金
- これにより、予備研究を実施し、詳細な研究実施計画をまとめていただきます。 →実施計画の概要
- 予備研究の成果ならびにそれに基づく研究実施計画を提出し、併せて報告会にて報告していただきます。 →成果報告の義務および研究報告会
- この報告結果をもとに、選考委員会にて選考が行われ、独創的かつ実施可能な研究計画が選出され、理事会の承認を経て、研究奨励賞が決定されます。 →選考方法
- 研究奨励賞受賞チームに対しては、賞牌および研究奨励金が贈呈されます。
- 研究奨励金は、各研究計画に基づいて、1件あたり500万円以下の必要額とします。(但し受賞チームへの贈呈金総額は5000万円以内とします) →賞金および研究奨励金
- この研究奨励金により、2ヶ年にわたる研究を実施していただきます。
- この2ヶ年にわたる研究の成果をとりまとめ、併せて公開の報告会にて報告していただきます。 →成果報告の義務および研究報告会
- この報告結果をもとに、選考委員会にて選考が行われ、特に優れた成果を得、今後とも長期的な研究が望まれるもの数件が選出され、理事会の承認を経て研究奨励特別賞が決定されます。 →選考方法
- 研究奨励特別賞受賞チームに対しては、賞牌・賞金およびその後の長期的な研究活動を継続するに必要な研究奨励金が贈られます。(金額等は追って定めます) →賞金および研究奨励金





## “身近な環境をみつめよう”研究コンクール 応募要項(抄)

### 研究コンクールの主旨

私たちの身のまわりでは、時々刻々と新しい変化が起こっております。それはある場合には自然の周期的な変化の現れであり、ある場合には人為的な活動の結果でありましょう。そしてこれらの変化は、日常生活の中で全く気づかれずに過ぎていることも少なくありません。しかし科学的な目でじっとみつめる時、そこに新たに起ころうとしている大きな変化の小さな兆(きざし)を発見することができるかもしれません。

私たちは今、日本列島という狭い土地にあって、高い密度で、しかも環境との微妙なバランスを保ちつつ生きております。もしこのバランスが、私たちにとって好ましくない方向に傾きつつあるならば、その兆を早目に発見し、速かな対応によってこの列島の舵とりをしていかねばなりません。そのために、すでに多くの人々によってさまざまな高度な研究活動が進められております。しかしさらに、地域の生活に密着した日常的な研究活動も必要です。

このような、それぞれの地域の生活に即した、密度の高い長期的な観測を必要とする研究活動は、専門の研究者に任すだけでは十分ではありません。むしろそれぞれの地域に深いかかわりをもって生きる人々の積極的な参加が必要となるのではないのでしょうか。それは研究活動としてだけでなく、環境教育・環境学習の実践としても意義あるものとなるでしょう。

この研究コンクールは、以上のような考えのもとに、地域で生活する人々と専門の研究者との緊密な共同による長期的な研究活動を促進し、“身近な実践的な環境科学”の発展にいくらかでも寄与できればと念願し、当財団設立5周年記念事業の一環として実施するものです。

全国各地から多数の独創的な研究計画が寄せられますことを期待しています。

### 研究コンクールの内容

このコンクールは左の図に示すスケジュールにより、息長く行われるものです。その概略は図中の説明をお読みいただくとお分りのことと思いますが、以下、この図

と対照させて詳しい内容の説明をいたします。

### ⇒対象となる研究(抄)

●このコンクールの対象となる研究は、“身近な環境”を対象として、その実態や動向を長期観測し、それによって日常生活圏の今後のあり方を模索しようとする研究とします。

●ここで言う“身近な環境”とは、日常生活と係りのある私たちの身のまわりの世界すべてを指しております。自然的・物理的側面のみならず、社会的・制度的側面や文化的・精神的側面からの“環境”の把握が期待されます。さらに、その“環境”の中に生きる私たち自身すなわち人間そのものも“環境”との関係において研究されることを望みます。

### ⇒応募方法(抄)

●このコンクールに応募ご希望の方は、まず当財団宛てに、官製ハガキによって応募用紙をご請求ください。

●財団から応募用紙(A-4 10枚)と「応募書類作成の手引き」をお送りしますので、研究計画に関する必要事項をご記入いただき、書留にてトヨタ財団研究コンクール係あてに郵送してください。

●応募締切日は昭和55年1月15日(当日消印有効)ですのでご注意ください。

### ⇒選考方法(抄)

●選考は次の3段階にわたって行われます。

- ① 研究奨励賞候補の選考(昭和55年2月)
- ② 研究奨励賞の選考(昭和55年9月)
- ③ 研究奨励特別賞の選考(昭和57年9月)

●これらの選考は、「研究コンクール選考委員会」によって行われます。

### ⇒準備助成金(抄)

●研究奨励賞候補の研究チームに対しては、約5ヶ月にわたる研究計画具体化のための準備助成金が支払われます。

### ⇒研究実施計画の概要(省略)

### ⇒成果報告の義務および研究報告会(省略)

### ⇒賞金および研究奨励金(抄)

●研究奨励賞受賞チームには、賞牌の他、一チーム500万円以内の研究奨励金を贈呈いたします。

●研究奨励特別賞受賞チームには賞牌の他賞金と研究奨励金を贈呈いたします。



## 助成刊行物紹介①

## 「タイからの手紙（上）・（下）」

ポータン著 富田竹二郎訳 井村文化事業社刊  
A 5 上272頁 下278頁 各巻1,450円

本書は「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成により出版された本のうちの一冊である。作者はタイに住む華僑の娘として生れ、家庭内では父親から中国の慣習や価値観を教えられて育ったが、一方学校教育はタイの教育を受けたため、考え方はタイの社会への同化を志向している。本書はこのような背景を持つ作者がタイ社会をタイ人として自己批判し、内部告発をするという意味で書かれたものである。

この作品は家出してタイ国に渡った一華僑が、故郷の母に手紙を書くという形式で、自分自身と子供たちのタイへの同化の過程、およびそれへの抵抗という相反する心理的力関係の展開をみごとに描写している。手法としては非常に工夫されているので、公開の席での発言ではなく、思ったことを何でも手紙を通して卒直に言えるため、作者の意見はもちろん、それぞれの立場からの意見や感情が明確に表現されている。

タイ社会では如何に善意から出たものであっても、自国批判は強い反撥を招くものであるが、作者は一人の華僑を登場させ、その青年時代からタイ社会に定着するまでの生活の描写を通して、中国人とタイ人の民族性、風俗習慣、思考方法を比較し、両民族の相互理解の可能性を示唆しながらも、タイ国、タイ人に対する卒直な批判を一華僑の口を通して語らしめている。同時にその子供達を通して忌憚のない華僑批判も行っている。

作者は勤勉と質実儉約を旨とする中国人と、怠惰遊蕩な性格のタイ人を対比させる。全篇100通になる手紙を通じて、タイ人、タイ社会は非難攻撃的となるが、結局人生においてより大切なのは華僑の拝金主義ではなく、タイ人の包容力、楽天性、慈悲温情の精神であるという結論を下している。

この作品は問題作として、賛否両論を招いたが、作者の若い正義感の発露は正しく理解され、1970年にはSEATOの文学賞を受賞した。またタイ文部省はこの作品を高等中学の課外副読本に指定した。

訳者はタイ語のみならず、中国語にも熟達されており、訳文も読み易く、東南アジア理解のための必読書である。

## 助成刊行物紹介②

## 「タイ民衆生活誌（1）——祭りと信仰——」

プラーヤー・アヌマーンラーチャトン著 森幹男編訳  
井村文化事業社刊 A 5 302頁 1600円

著者の故アヌマーンラーチャトン博士は「タイ国の柳田国男」と評される碩学である。学識経験者として政府機関の多くの要職を兼任した。また、反体制の知的エリート達からもリーダーとして、尊敬された。貴族階級が圧倒的に優位を占めるタイ国の学問社会に在って、平民出身、低学歴（中等4年修了）にもかかわらず、最高位を極めた努力と勤勉の人でもある。

博士の著作は優に250篇を超えるといわれる。海外では伝統的タイ文化の研究に関する著作活動で知られている。しかし博士は文学者でもあり、全著作の半数は文学作品（随想・評論・小説・翻訳）で占められている。

ここに紹介する「タイ民衆生活誌（1）」は、博士の膨大な著作の中から、タイ民衆の生活、風習を理解するのに適当と思われるエッセイを森幹男氏が選び、訳したものである。タイ人の世界観、人生観、価値観を知る上でも大変有益な本である。タイ国の正月、ソーンクラ-

ン祭を初めとして、稲作労働と結びついた祭礼の数々が紹介されている。一年を季節毎の祭りで区切り、生活に秩序をつけ、人々が遊び楽しみ、労働へと戻ってゆく、形骸化されていない儀式である。それらを深い人間愛にあふれた目で観察し、喜々として祭りに参加する村人達の姿を描き出している。その筆は自由奔放、流麗であり、民族学には門外漢の者をもひき込んでしまう。行間からは、博士の真摯な学問に対する態度、人生観、現代タイ国への警句を読み取ることができる。

博士は、土着主義という視点から、タイの固有文化を全体的に把握しその基本性格を見極めようとした。博士の手法を批判する海外の研究者もあるが、訳者森幹男氏は「理論的完全武装のタイ文化論も、博士の手になるわずか数行のエッセイの前に、たちまち色褪せてみえる。学問も、結局はヒューマニティの問題に帰着するのであろうか」と書いておられる。

付編として、ピー（タイ国の自然の中にいる祖霊）についての詳しい説明がつけられている。

本書も「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成の対象となったものである。



## さまざまな地域研究

### ——特定課題研究の助成対象から——

従来からの三領域の研究助成に加え、本年度から特定課題の研究助成を始めた。テーマは「地域社会の変化に関する実証的研究」というもので、戦後30年における日本の急速な近代化ないしは物質文明の普及が、日本の各地域社会をどのように変えていったかを実証的に把握しようとするものである。しかもできることなら、従来のある程度確立した地域研究に対して何がしかの新しい展開を促すことができないだろうかというのがネライであった。

特定課題に寄せられた申請は合計108件、金額にして約3億5000万円であった。まず全申請について三領域の選考委員の先生方に第一次評価をお願いした。1件の申請につき5名の先生方に見てもらい、適切と認められたものを推薦してもらう。少なくとも選考委員1名以上の推薦を得たものが約40件あった。これを次の選考にとりあげる。当初の予定では以降の選考業務は三選考委員長会で行うこととしていたが、テーマや研究方法の多様さからこれは至難の技である。従って各選考委員会から特定課題の主旨に沿って1名ずつの特定課題委員を出していただき各委員長も含めた6名の「特定課題研究委員会」を設けた。ここで約40件の申請を、多面的に検討し、論議を重ねて最終的に16件約3000万円の助成候補を選出したのである。これらはいずれも理事会の決定を経て助成対象となった。

★ ★ ★

さて、16件の採択された研究テーマを見ると実にさまざまなものがある。共通して言えることはいずれも研究対象地域と研究者との間に強い関係があるという点である。以下いくつか特徴的なものについて紹介したい。

#### (継続的な追跡調査)

今回の課題の主旨—なかでも「変化を実証的にとらえる」という観点から、これまで地道に一定地域を対象として調査を進めている研究がまず浮びあがってくる。

「日本農村の近代化と社会変化・文化変容に関する実証的研究(牛島盛光)」はその典型的なものであろう。牛島教授は、故 John F. Embree の不朽の著作“Suye Mura (1939)”に示された調査実績を出発点として、同須恵村(熊本県球磨郡)に関する追跡調査を戦後10年きざみに行

ってきた。その成果はすでに著作としても発表されているが、今回さらに第3回目の調査を実施し、昭和初期から現在に至る一農村の社会経済構造、人間関係、生活様式、価値観の変化を詳細に分析する計画である。

同じく長期的な追跡調査を試みようとするものとして「下北半島出身者の職業的社会化過程についての再追跡調査研究(細江達郎他4名)」がある。この研究グループは15年前に下北半島を含む東北地方の中学3年生を対象としてその後の生活展開についての調査を開始した。このうち10地域の875名については9年間の追跡調査を行ってきたが、今回、中卒後15年を経て成人中期にさしかかった彼等を再び追跡調査しようとするものである。個人の生活史と職業との相互関連を明らかにするとともに、個人のライフサイクルと地域社会・産業社会の動向とのかわりを分析しようとするものであり、社会心理学分野からの地域研究として興味深いものがある。

「南会津・大内村の生活研究(相沢韶男他3名)」も10数年にわたる実証的な調査実績の上に可能な研究である。昭和42年、当時建築学科の学生であった相沢氏はこの村を訪れて宿場町としての重要性を見出し、実態調査を開始する。その後宿場の保存を村に提案したり、農作業を手伝いながら調査を続け、すでに膨大な資料を集め、いくつかの研究実績もあげている。今回の研究ではそれらを整理・分析するとともに、新たに植物生態学の研究者の協力も得て現時点での実態調査を行うこととしている。一つの村を対象として自然との関係の中に人間の生活を体系化しようとする意欲的な研究である。

「農業生産構造の変化に伴う村落生活の変化の追跡調査(松永和人)」も10数年に及ぶ研究の蓄積の上に地域社会の変化を把握しようとするものである。特に、生産構造が共同体の性格をどう変えたかを軸としてキメ細かく村落生活の変化を追跡しようとしている点が特徴的である。  
(地域の生活者自身による研究)

今回の特定課題研究の特徴の一つとして専門の研究者以外の人たち、すなわちその地域での生活者自身が中心となって自らの地域を研究しようとするものが目につく。

その代表的なものは「地域社会“西陣”の戦後の変化に関する実証的研究の為の予備的研究(野中明他10名)」であろう。織物の町“西陣”は、職人の高度な熟練技術と近代的な機械技術の組み合わせによる独特の生産体系によって戦後30年の発展を維持してきた。この研究はそこ



で展開された個人・小集団・地域社会の生活を、その環境条件や生産体系の変化との関連で把え、あわせて伝統産業の発展と次世代の創造的活動に生かそうとするものである。代表者をはじめ研究メンバーのほとんどは西陣で働く若い人達である。これに京都府の中小企業総合指導所のスタッフやこの地域に強い関心をもつ外部の研究者が加わった大変ユニークな研究組織である。

「過疎の再生産構造についての実証的予備研究（高橋直栄他5名）」も新潟県下の過疎山村に生活する若い人々が自らの地域を対象に研究を行おうとするものである。住民の意識調査に加え子供達の生活や進路の実態、意志決定過程までも立ち至って分析し、労働力再生産の視点から離農や挙家離村のメカニズムを解明しようとしている。同じく過疎山村を対象としたものでは「山形県朝日村の変動に関する予備研究（結城清吾他9名）」がある。これは地元の工業高等専門学校教授を指導者として朝日村役場の若手職員が独自の目で地域社会の変化を描き出そうとするものである。

これらの研究はいずれも予備的研究である。このような専門の研究者以外による研究が果して可能かどうか。少なくとも学術的な研究成果をあげるといふ点ではどこまで可能か。助成する立場からすれば不安がないわけではない。しかし予備的研究を通して独自の研究体制・研究方法を確立し、単なる勉強会以上の成果をあげ、従来の地域研究に対して新しい息吹きを吹きこむことを期待したいのである。

（政策評価的な地域研究）

地域振興のためにとられた施策が地域社会をどう変えてきたかを追跡しようとする研究もいくつか目につく。

「ムラづくりの系譜と展望（清成忠男他4名）」は大分県湯布院町における昭和30年以降の独自の地域振興策を追跡調査し評価して今後の展望を計ろうとするものである。

「戦後の沖縄地域における水利用と土地利用に関する総合的研究（玉野井芳郎他9名）」は沖縄農業のモノカルチャー化の経緯を水利用と土地利用という側面から分析し今後の農業対策の展望を計ろうとするものである。

「乾田化および新港建設がもたらした富山県射水地域の変容に関する実証的予備研究（足立原貫他5名）」は新産業都市建設事業の一環として行われた表題の施策がその後の地域社会をどう変えたかを追跡し、地域開発計画のあり方を理論的に追求しようとするものである。これ

らの研究はいずれも地元の関係者と中央の専門家との共同で行おうとしている点、各地域の計画に何らかの形で関係した人が研究者に加わっている点に一つの特徴がある。

「戦災復興計画における計画思想とその都市形成に及ぼした影響に関する予備的研究（石丸紀興）」は広島市を対象に都市計画思想と都市形成との関係を明らかにしようとするものであり、やや趣きは異なるがこれも広い意味で政策評価的な地域研究と言ってもよいであろう。

★ ★ ★

紙数の都合でこの他の紹介は割愛させていただくが、どの研究もいずれかの点においてユニークな視点にたつものであり、この一年間の成果が大いに期待されるのである。なおこの特定課題は今後2年位新規の公募を受けつけたいと考えている。また適切な時期にまとまった報告会をもちたいとも考えている。（山岡記）

＜編集後記＞

▶ラッキーセブンの第7号、財団設立5周年記念号ともなりました。

▶研究助成の選考を過去5回にわたって担当されてこられた三領域の選考委員長の先生方に、これまでの選考を振り返ってというテーマで原稿をお願いいたしました。お忙しい中を大変示唆に富むご意見、ありがとうございます。

▶設立5周年を記念して3つの記念事業を計画しましたがその中の「アジアの子供劇場」はこの夏の盛りの暑い中、無事好評のうちに終了いたしました。この記録を8mm映画とパンフレットの形で現在編集をすすめています。11月中にはできる予定ですので関心のあります方はお申し出ください。

▶“身近な環境をみつめよう”研究コンクールの方もやっと公募にこぎつけました。予告広告後すでに200件を超える問い合わせを頂きました。素晴らしい研究計画をお待ちしています。

▶編集後記の最後はいつものことながらトヨタ財団レポートのP.R. 本誌を継続送付ご希望の方は官製ハガキにて登録ください。無料でお送りします。年4回発行予定。

トヨタ財団レポート No.7

発行日 1979年10月15日  
 編集発行 財団法人 トヨタ財団  
 (担当 山岡 義典)  
 印刷 ㈱八重洲企画